

S P A C E S K Y （宇宙を巡る運び屋の物語）

1

弓月キリ
月夜のよろず屋

目次

プロローグ

1. 二人の出会い

2. 仕事のトラブル

エピローグ

あとがき

6

10

28

36

42

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる環境により、表示の差が認められることがあります。

本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものです。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場しますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

なお、発行している小説本やグッズは、すべて自分で製本・制作しています。（全てコンビニプリントやセルフプリントで印刷し、自分で平綴じ製本またはフリーソフト等を使って電子書籍データへの変換をしています）

そのため、乱丁・落丁・あまりにもひどい汚れ等がありましたら、お取替えさせていただきますので、弓月キリまでメールかTwitterのDM等にてお知らせください。

読んでいて気になりそうな汚れや不揃いの部分、ズレなどではできるだけように配慮して印刷・製本・制作しておりますが、本文に影響のない軽微な汚れやズレなどは何卒ご容赦いただけますと幸いです。

プロローグ

「マス、ター」

まずは、その場に座り込んで、できる限り弱々しい声でマスターを呼びましょう。

「リイン！」

ほら。優しい貴方は、私を心配せずにはいられないでしょう？ 慌てた顔で私の下にやってくるのが見えますね。

「わた、しは、宇宙一、幸せな、アンドロイド、です。マスター、リクに、出会え、たのですから……」

もう少しです。あと少し。

「リイン、お前」

「マスター、それ以上は何も言わないでください」

近づいたマスターのため息。思考回路は私に危険があると伝えてきます。

「いや、「何も言わないでって言いましたよね？」」

なにやら危ない感じがしますので食い気味でマスターの台詞を防ぎましょうか。

「おい、隙あればサボろうとするんじゃないやねえよ」

「……」

「さっきまでピンピンしていたよな!?　なあ、お前、機械なんだよな?　もうちょつと何か考えられたよな!」

「……ちっ」

「舌打ちした!?　なあ、お前。負担がないように業務内容を調整しているでしょ!　給料も高くないけど渡しているでしょ!　何が不満なのよ!」

仕方ありません。今日の『遊び』はここまでですね。

『『お約束』って知っていますか?　マスター』

「なんで、俺、お前と漫才しないといけないの!?　おい。あざとさを狙って小首を傾げてもダメだからな!」

「はあ……。マスター、はい、これ」

しれっとマスターに差し出したのは数枚の書類。マスターは疲れた顔で私から書類を受け取って中身を見て、顔をしかめました。

「おい。これは俺が今朝お前に渡した書類で!　今日のお前の仕事だろ!　何もできてねーじゃん!」

仕方ないので、マスターから突き返される書類を受け取ります。誤魔化せると思ったんですが、失敗です……。

「ちっ」

「舌打ちしても駄目！ 仕事はちゃんとやんなさい！」

「はあい」

「リイン？」

「やります、やります、マスター！ お願い、捨てないで！」

うう…、怒ったマスター、怖いよう。

別室に去っていく背中揺れる金髪を見送った後、俺は操縦席について一つため息をつく。

「捨てるわけ、ねーだろ……。なあ、リイン^{相棒}」

一緒にいるのは長いとは言えない期間だけど、今のお前は俺の大切な所有物だから。

1. 二人の出会い

今日は私の定期メンテナンスの日です。人間で言う健康診断ですね！

メガネをかけていて茶髪を後ろで一つに束ねている白衣の人間はシュウさんです。機械に強いマスターの友人で今の私にとってはお医者さんなのです。シュウさんは私に測定用の機械を取り付けて髪の色と同じ色の目で真剣にモニターの数値を見ていたのですが、一つ頷くとモニターから離れて私のそばに来ました。

「はい、リインちゃん。定期メンテナンスは終わりだよ。今日も異常なしだよー」

シュウさんがこつと微笑むと私から測定用の機械を取り外します。

「ありがとうございます。シュウさん」

ベッドから起き上がってぺこりを頭を下げて服を着ます。シュウさんは私にとってマスターの次に大切な人です。

「いえいえー。これが今の俺の仕事だからねー。おーい。飼い主さん、終わったぞー」

シュウさんが私が服を着たのを確認してから扉を開けてマスターを呼びます。

「え、今、飼い主って言いましたよね？ 私はペットですか!？」

「いつもありがとうな、シュウ」

シュウさんに問い詰めていたら、短髪の長身男性が私達がいる部屋に入ってきました。この、

黒色の髪に黒のジャージ姿が私のマスターです。眠たそうな黒の目が私を見ます。さっきまで寝ていたのでしょうか？ それにしても、相変わらず、夜に歩けば目立たずに動けそうな格好をしていますね……。

「リイン。暗殺者が主役のアニメを見たな？」

「な、何も言っていないです！」

何で私が思っていることを分かったのですか!?

「お前は夜に寝なくて済むとはいえ、夜はちゃんとスリープ^寝しなさい」

なぜ私がアニメを観ているのを知ってるんですか!? マスターは私のことをアンドロイドだと知っているのに人間扱いする変わった人です。定期メンテナンスのときだって私の女性型の外装^機パーツを見るのが気まずいとのこと、マスターはいつも別室にいます。マスターは機械の体を見たって興奮するタイプでもないと思うんですけど、なぜですかね？

「リク。定期メンテナ^いンス代、1金コスモスねー」 ※日本円で10万円です。

「ほい」

「まいどー。いつも現金一括払いだから助かるよー」

「さっきの飼い主発言の件、終わってないですよーっ!!」

「リイン。いい加減にしないと、定期メンテナンス代をお前の給料から引くけど？」

「いやー!! 私のリフォーム代だって給料から差し引いているのに、これ以上、差し引かない

でー!!」

「リフォーム代って」

「シュウさん、私の場合は間違っていないでしょ？　いたっ」

マスターがハリセンで私の頭を叩きました。ハリセン、どこから出したんですか？

「そうかもしれないが、反応に困る自虐ネタはやめなさい。リイン」

「はあい」

「そういえば、リインちゃんと出会って、もう一年になるのか」

「あら。そういえば、そうですねえ」

「製作者に会うことは無いと思うんだが、会ったら問い詰めたいんだよ。こういう神経して、リインを作ったのかと」

「酷いですよ！　マスター！」

「いてっ。わるい、悪かったって！」

力を入れずにマスターを叩きます。本来、私の立場からするとマスターは叩いてはいけないのですが、マスターが「つつこむときは立場を気にせずつつこめよ。あ。お前、力加減は間違えるなよ！」と言われているので、あまり気にしないようにしています。

「いつも思うけど、漫才みたいだね」

私もシュウさんも笑います。マスターはふてくされています。私はマスターと初めて会った

ときのことを思い返していました。



『生体反応確認。起動条件適合。マスター検索…生体反応ロスト。前マスター死亡につき、マスター再登録の必要性を確認』

「え、なに？」

『マスターチェック…シンクロ率90%。所有者^{マスター}条件適合。所有者再登録完了。再起動を開始』

「え、これ、俺、どうしたらいいの？」

『再起動完了。損傷チェック…：損傷率60%。思考パーツ及びメモリーに懸念事項あり。セーフモードに切替…』

「よし、見なかったことにして、逃げ…「セーフモード切替完了。マスター、お名前を」

「俺？ リク」

「マスター名【リク】でマスター再登録完了。これより個体名【RIN1023】はマスターの指揮下に入ります。何なりとご命令を…と言いたいところですが、申し訳ありません。損傷